

【選評】

東京大学准教授

伊藤亜聖

杉原薫**
世界史のなかの
東アジアの
奇跡
The East Asian Miracle in Global History

名古屋大学出版会

世界史的成功体験からみる 成長のダイナミズムと 見過ごされた課題

本書を手にとつて、ある人に教えてもらった言葉を思い出した。「歴史学者は皆、本当は『世界史』という本を

書きたいんだ」と。本書は近世から二〇一〇年代までの東アジアを対象に、その経済発展の経路と意義を検討

世界史のなかの東アジアの奇跡

杉原薫・著

名古屋大学出版会／2020年10月／6930円

したものだ。昨今は一足飛びに原始社会から人工知能時代までの人類史を語る本も書店に並ぶから、この議論のスケールに驚かない読者もいるかもしれない。

主題は「東アジアの奇跡」である。世界銀行が一九九三年に発表した報告書のタイトルであるこの言葉は、東アジア諸国が国際分業に積極的に参画する輸出指向型工業化によって、所得格差を縮小しながら高度経済成長を実現したことを、一大達成として位置づけたものだ。

本書はそれを世界史の中に位置づけるようにする。

「過去二世紀の歴史は、ヨーロッパの奇跡のより広い世界史的文脈への移し替えの歴史であり、二〇世紀後半の歴史は、それが南北対立、東西対立を乗り越えて、東アジアの奇跡というかたちで定着する歴史であった。」(本書

3頁)。先行研究を踏まえ、分析フレームワークと実証的なデータに基づいて書かれる学術書として、この問題設定は、私には限界に近い大きさだと思われる。取り組む課題の大きさ、空間的な検討範囲の広さに加えて、持続可能な開発目標（SDGs）とも深くかわる研究展望を示している。

比較優位としての労働投入

本書はまず、第一編（1～3章）で、西洋型の経済発展の経路に対して、東アジア型の経路を示す。つづく第二編（4～8章）では近世のアジアでの経済秩序を、西洋と対比させながらヒト、モノ、カネの観点から整理し、第三編（9～13章）で戦後東アジアを議論している。南アジア、中東、イギリスを検討する章も含まれる。

議論の根底には、経済発展を生産要素の投入のパターンから見ると、その

経路は一本ではない、という複線型の視座がある。著者は次のように述べる。「東アジアの奇跡は、一六〇一―一八世紀の間に培われた東アジア型の経済発展経路が、一九世紀のウェスタン・インパクトのなかで『再編』され、さらに第二次大戦後の冷戦体制下のアメリカの力強い成長の影響を受けて、本格的に西洋型経路と『融合』することによって、実現したものだと思える。」（本書11頁）。

日本では、江戸時代に資本投入が制約されたなかで、労働力の投入によって生産量を増やす経路、いわゆる「勤勉革命」が起きた。西洋で見られた機械化、資本投入に依存した資本集約的な工業化に対して、近世からアジアでは労働投入をけん引役とした労働集約的な技術選択が見られた。戦後にこれらが東アジアで「融合」し、労働者への分配を通じて、より公平な社会の創

出にもつながったと著者は見る。

本書の最大の魅力はシンクルな概念で、近世から戦後の東アジアの経済発展を描き、世界の中に位置づけていることである。着眼点は前述の通り、投入要素にある。希少な資源は何かという要素賦存に応じて、それぞれの経済の比較優位が決まる。人口稠密なアジアでは、その条件を活用する方向で経済発展が始動する、との説明だ。

第二の魅力は、近世から戦後期までを連続した視点を描いていることである。この作業を国ごとの個別経験の連続と断絶によってなすのではなく、産業革命期前後に見られたアジア域内貿易の論理と、戦後に見られた米国の最終市場とする東アジア生産ネットワークを比較することで検討している。冷戦の終結によって脱軍事化した東アジアが、二〇一〇年代に再び軍事化の様相を呈しているとの一歩引いた指摘

も、米中対立の激化を間近に見る中で
は示唆に富む。

いまひとつの魅力は、本書の議論が
空間的にはアフリカ、論点としては持
続可能な開発にまで到達していること
である。終章では類似の経路がアフリ
カに広がる可能性が指摘される。また
人間活動が生態系に与える影響を視野
に収める生存圏との概念から、資源節
約的な発展経路が今後の世界経済に
とって貢献となりうると述べる。

高度成長の代償

二〇二〇年代にあつて、アジアの経
済発展の意義を説くことは、その規模
からすればもはや異論はないだろう。
ここで考えてみたい論点は二つある。
第一の論点は戦後東アジア経済の経路
の位置づけである。そして第二の論点
は、その経路が今後の新興国・途上国
に対して今後どのような意義を持つの

かである。

第一に、東アジアの資源節約的経路
が成り立つまでの高度成長期の環境負
荷をどのように考えればよいのだろう
か。例えば労働集約的・資本節約的工
業化と真つ向から対立する重化学工業
化路線を採用した計画経済期中国が問
題となる。中国の経済学者、林毅夫
(ジャスティン・リン)の議論に見ら
れるように、計画経済期は、本来の中
国の要素賦存から逸脱した戦略を採用
したと位置づけられ、論理的には片付
く問題かもしれない。第三章では現代
中国の経済活動が環境に与える負荷の
大きさを踏まえつつも、徐々に効率化
に向かいつつあると指摘される。

しかし、世界一の人口密集地域が、
そして人口大国が、化石燃料に依存し
て高度成長を追い求めた代償は、決し
て小さくない。私は、北京オリンピック
ク開催前年の〇七年に北京のスモッグ

にまみれ、学生寮に戻って鼻をかんだ
ときの、あの黒ずんだティッシュを忘
れることができない。また浙江省の臨
海工業都市の工場を回る中で、くすん
だ空に驚く私を見て、同行した京浜工
業地帯を専門とする研究者が、「私が
子供の頃の川崎もこうだったよ」と
語った言葉が忘れられない。土壤汚染
が深刻化したために、バンコク郊外の
エビの養殖場が、雁行形態的に後発の
東南アジア諸国に移転したことも、過
去の話ではない。西洋型との比較で相
対的に資源節約的だったとしても、そ
れは環境に絶対的にどのような意味を
持つのか。

顕在化した地政学の影

第二の今後の展望については、地政
学の時代の再来とデジタル化の影響を
視野に入れる必要もある。

本書の議論に直結する個別論点の一

つは新技術、なかんずくデジタル技術が今後の工業化と経済発展に与える影響である。雇用を創り出す製造業の意義は残る。ただ、急速に進むデジタル化がいかなる影響を与えるのか。過激な立場としては、労働集約的な製造業が技術革新によって自動化され、先進国に回帰するとの見立てもある。一方、新興国・途上国の政府も、「第四次産業革命」なる言葉に期待を寄せている。

すでに引用したように、著者は「東アジアの奇跡」を、世界経済が先進国と途上国の南北対立と、自由主義と社会主義の東西対立とを乗り越えるものだったと位置づける。東西南北に関わる世界史の一つの十字路をなすものだった、と言えるかもしれない。そして本書は終章で「グローバルな奇跡」が起きる可能性と課題を視野に入れている。

しかし目下には米中の「新冷戦」

そしてグローバルと一国内の両面で著しく広がる経済的不平等の問題がある。南北と東西をつなげた「東アジアの奇跡」の一つの終着点であった、中国沿海部の本格的工業化は、政治上は中国共産党体制を揺るがすことなく実現し、そして二〇四九年に超大国としての地位を確かなものとするという「中国の夢」を見ている。

冷戦終結後に世界大に広がったインターネットは、二年ごとに倍増した計算能力と相まって、別次元のデジタル経済を作り上げた。人々の定型的業務は自動化されつつあり、プラットフォーム企業の巨大化が競争環境を歪めている。そして資本の集中と再投資は、いっそうの富の偏りをもたらしている。かつての東西南北問題が、東アジアで解消に向かった時代の先には、新たな東西南北問題が立ち現れているのだ。

「奇跡」への高いハードル

最後に、本誌の読者に問いたい。「インド太平洋の奇跡」はありえるのか。あるとしたら、その達成はいかなるもので、それを支えるメカニズムは何か。日本はその奇跡にいかに関与できるか。本書の壮大な世界史的構想の横に座り、新たな東西南北問題が眼前に広がるなかで、インド太平洋で「奇跡」と呼びうる世界史的な社会経済的・生態圈的達成が起きる条件に思いをはせる。それは持続可能な開発をけん引するものでなければならぬ。工業化とデジタル化を融合させたものでなければならぬ。また、新たな東西対立と新たな南北対立を解消させるか、押しとどめるものでなければならぬ。このように「インド太平洋の奇跡」の条件を検討するならば、それはかくもハードルの高いものとなりそうだ。●